【取扱い厳重注意】

543

平成２４年３月１日

聴　取　結　果　書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局
局　員　　齊　藤　修　啓

平成２４年２月９日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第１　被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

１　被聴取者
池田元久　元経済産業副大臣

２　聴取日時
平成２４年２月９日午前１０時００分から同日午後０時４０分まで

３　聴取場所
衆議院第一議員会館１００４号室

４　聴取者
柳田邦男　委員
高嶋智光　参事官
飯崎準　　参事官補佐
岡田幸大　参事官補佐
齊藤修啓

５　ＩＣレコーダーによる録音の有無等
■　あり
□　なし

第２　聴取内容
事故対応全般について

第３　特記事項
特になし

以　上

【取扱い厳重注意】

○質問者　お願いします。

○池田元副大臣　今日はよくお越しいただきました。

まず、資料はあらかじめ、柳田さんが来る前には説明しておきましたけれども、ここに資料と書いたものがございます。あとで追加することもやぶさかではありませんが、私の方で基本的な点でこういう点がいいのではないかと。

まず、1がメモランダム。[redacted]

これはとりあえず3月11日～15日まで、事故発生後から福島県庁へ移転するまでと。なお、その後、私は3月末からずっと5月20日過ぎまで再び現地へ赴きました。その間は経産省で、それこそ朝から晩まで事故対応及び石油パニックとか電力対策とかやっていました。

まず、このメモランダムは15日まで。そして、メモランダムというのは、秘書官に現地を離れるところ辺りからまとめようといってまとめ始めたのですが、その他業務が煩雑でして、そのままになっていました。

11月末か12月になって継続を始めて。その前に次のクロノロジーとメモランダムというのを大変でしたがつくったわけです。

これは後で皆さんがコピーをされたらいい。まず、全体を書いてあって、現地の動きが書いてあって、私のメモが書いてあります。それでも、結構分量があるのです。これは是非、お読みいただければ、東京と福島と立体的にわかると思います。

今日はちょっとページ数が多いので2部のみつくって、そちらに。

3つ目が、3月13日の夜、本部へ送信した8つの文書。文書はこれだけではないのですが、例示です。この後もいっぱいありますけれども、事実上、活動を始めた12日、13日の会議等で配った、決めたことについてせき止めて、私の考えで本部へ送った。いかにどういう活動をしていたかということは俯瞰できるし、よくわかると思います。

それから第4は、トピック的に非常に危機が進行して、その一つである、3月14日朝の現地本部長の判断による注水強化の資料。

5番目は、14日未明から始めた、双葉地域の要救助者のリスト。

6番目が、現地で5日間いたことで私が感じたことで、それに基づいて翌日、すぐに保安院に6項目の指示を出したと。

7番目は、3月15日までのことではなくて、その後、次に行ったとき以降の現地対策本部長の活動。仮払金の支払いとか、住民の一時帰宅、公益立ち入り等々についての、本当に簡単な要点だけの資料ということであります。

では、メモランダムを参照していただきながら、ごくかいつまんでお話をしたいと思います。それで質問にいきたいと思います。資料1でいいですね。

○質問者　これは経産省の公的な記録などとの時系列は、突合せがあるわけですか。

○池田元副大臣　これは原本がありますが、まだ未公表の経産省の時系列です。クロノロジーもそうです。それから、政府の原災本部のクロノロジー的なもの、それから私と秘書

官が持っていた資料から組み立てたというもの。

これは一応、この辺全部まだ未公表です。この３番目だけは公表しているのかな。

資料の説明は以上でございます。

まず、冒頭陳述ではないけれども、後の質問にも関わってくると思うのですが、これをざっと言いますので、あとは詳しくはメモランダムを後で読んでいただければいいので。

地震発生直後には、経産副大臣室におりまして情報が次々入ってきて、経産省としては、途中省いて、午後４時 45 分だと思うのですが緊急対策本部を開いた。５時には池田副大臣を現地対策本部長として派遣することを決定いたしました。

会議の終わる前に飛び出して、とるものもとりあえず待たせていた車に乗った。私は柳田さんと同様でありましたから、そういうときは早いのです。スクランブルでパッと出たのです。

ところが、黒木審議官が車に乗るからおかしいなと思っていたのですが、車で行くというのです。パトカーの先導がつくというのですが、パトカーの先導が来ない。私の副大臣車の運転手さんが上野方面へ行って、１時間も経ってしまった。これはまずいと思い、松永の事務所に電話して、自衛隊のヘリを手配してくれと言いました。

上野近くまで行って、そこで市ヶ谷の方へハンドルを切って。そこでパトカーがいましたけれども、そのときはもう人がいっぱいでした。そこから 30 分ぐらいかかったかな。後で参照してください、時間が全部入っていますから。それで市ヶ谷にようやく着いた。ですから、もう８時半ぐらいになっていた。

それで、小川勝也副大臣がいて、いろいろ自衛隊の話を聞いて、準備ができたので飛び立った。そのときは我々の３人だけではなく、原子力保安院の山本君とか、海老根君という、原子力安全委員会の職員も一緒に行ったのです。

サイトの近くには着陸できない。結局、大滝根山分屯地で航空自衛隊のレーダーサイトがある。標高 1,000m、まさに山頂にあるわけです。そこに降りた。

そこでは自衛隊が迎えに来てくれて、コーヒー１杯飲んだだけで、すぐに山を下りた。山は真っ白で、自衛隊車の先導で雪道を降りて、下に降りてきたら、それこそ地震の被害が散見されると。道路にひびが入ったり、壊れた家があったりして。それで 12 時前ぐらいにオフサイトセンターに入った。

しかし、そこでは DG というか、非常用ディーゼルが働かなかったということで、幸いにして全く隣接地に県の原子力センターがありまして、そこへ入った。既に内堀副知事も来ておりました。まず、出発のときの対応が悪かったということは、後で指示しました。

そこでまず、状況把握をした。非常に私にとってよかったのは、一緒に黒木審議官が同行して、時間が車の中でありましたから、原子力事故とは何かから、全部大体おさらいできた。

よかったと言ったら語弊があるけれども、NHK のニュースを聞きながらどうするこうするというのは、無学文盲の僕でもかなりわかった。

そこで、まず保安検査官が原子炉の状況を説明してくれるのですが、要領を得ないわけです。原子炉の圧力、温度、水位ですが、どうもはっきりしない。

東電の係長を呼んで、ダウンスケールとかいろいろ、計器が働かないとか勿論、あるわけですけれども、もうちょっと事実のデータをしっかり把握するように言ったのです。

特にベントが話題になっていましたから。海江田が3時から記者会見をすることになっていましたので、それはちょっと後です。ベントは既に検討という話が出ていましたから。ベントについては、私はやはりこれは放射性物質を降らせるわけだから大変なことなのだと。それをやるのが定石かもしれないけれども、それをやるのならちゃんとしたデータが必要だということを言いました。

東電の係長に言いまして、保安検査官の方はどうもちょっと要領を得ないので。そのくだりは、詳しくはここに書いてあるとおりです。

それで私は、ベントについてもしっかり対応しなくてはいけないなと思い、それで初めは海江田大臣には到着の報告はしたのですけれども、松永次官に、ベントについてはまずデータの把握をしている、ベントは一義的には事業者の判断でやるべきだということを言いました。その後、保安院の会見で同様のことを言っているわけです。余りにも政治が前のめりになっている印象もあったし、そういうことを言ったわけです。

しかし、その班長が2時半ごろになったら、格納容器の圧力が設計圧力を超えてきたということを言ってきましたので、私は別に決定権はないのだけれども、了承したということがあります。

ですから、そこは大変緊迫していましたが、しっかりとデータの把握、冷静に対処しなくてはいけないということでやっていました。そのうち、3時前になって電源が復活したので、オフサイトセンターに入ったわけであります。それが1つ。

入った後の午前4時ぐらいになったら、今度は菅総理が来るという話が入ってきたので、後で詳しく見てほしいのですけれども、これは困ったなと。[redacted]事務的には来ても来なくてもいいのだけれども、要するに全体の未曾有の災害対策としては、私としてはこれはまずいのではないかと。

つまり、津波も未曾有ですよね。テレビで繰り返し報道されている、家が流され、船が流され、港が渦巻いていて、人が何人行方不明になっているかわからない状況で、人命救助は72時間が鉄則ですよね。

ですから、それは72時間を有効に活用するというか、72時間はしっかりと人命救助に努力すべきだと。

それから、現地の状況は確かに現地に来て見ることもできるけれども、後で言いますけれども、全体状況を見るのは、今の時代では東京が一番いいわけです。通信手段もあるし、いろいろ。事故も全社的に対応しなければならないわけだから。ただそこへ来て施設の状況がわかるというのではなくて、東京にいた方が事故対応がしやすいのではないかという利点から、ちょっとまずいなと。

どうしても来るのであれば、一国の総理を安全に過ごすというか、何らかの危険な目に遭わせるべきではないので、オフサイトセンターに来なさいと黒木審議官に言ったのだけれども、黒木審議官も保安院に言ったのですけれども、後で聞くとどうも保安院止まりだったらしい。官邸との間にコミュニケーションが成立していないというのかな。これは何か理由があると、断定できないけれども僕はあると思う。

それでいよいよ菅さんが来ました。私が発表したわけではなく、メモランダムを書いてずっとフォローしている記者がいたから、それが真面目なドキュメントの記事として発表するというものですから、それはやはり後々のために必要だと思って出しましたら、何と菅が怒鳴りまくったことだけ書いてあるわけです。非常に遺憾なのですが。

だけど、その内容は客観的な事実なのです。後でそれを否定したようなあれが新聞に出ていますけれども、全く客観的な事実で、私だけが感じたことではなくて、みんなその場にいた人は感じて、ちゃんと裏をとってあるわけです。非常に強烈な印象ですから。

菅とは私はずっと付き合いがあってよく知っているわけです。寺田補佐官とかよりはるか前から知っているわけです。ずっと一緒にやってきて。イラ菅で有名ですが、この日は特別なものがあって、かいつまんで言うと、バスに乗り込んだら、私はバスの配置を決めておいて、武藤さんと並んで座ってもらったら、いきなりそこで怒鳴りつけて、何が何だかわからない。とにかくベントだと思うのですが。

今度は免震棟に入った。そこに交代勤務だと思うのですが、作業員の人が大勢いた。中には上半身裸というか、除染などの人だと思うのですが、大変だなと思ったのです。その前で菅は何と言ったかというと、何でおれがここに来たと思っているのだと言ったのです。これには私はあきれました。

武藤や寺田に言うならまだしも、一般の人の前で言ったので、イラ菅にしても今日はひど過ぎるなと思って。秘書官なんかもみんなびっくりしたと思うのだ。

今度は上に上がっていって、武藤と吉田に会ったわけです。それはここに書いてありますけれども、要するにベントについて言って、最後は決死隊をつくってでもやると言ったので、そこはちょっと落ち着いた。菅は落ち着いていなかったけれども、一応ちょっとね。

だけど途中、[redacted]に怒鳴ったり、内堀に安定ヨウ素剤のことを聞いても、つまらないことで怒鳴ってみたり、終始ひどかった。大荒れでしたね。ただし、私については何も言わない。それは長いあれがあるのかもしれないが。ただ、私にはドアを出るときに頑張ってと言いましたが、そこは冷静だったかもしれないけれども、すごかったです。私が言うのだから間違いない。

それでバスで、ごく近くのグラウンドから飛び立ったのだけれども、ヘリのエンジンが冷めてしまってなかなか飛び立てなかった。私たちはずっと立っていましたよ。もう帰れと言ったけれども、立って見送っていった。

事故対応そのものではないが、指導者論に関わるのですがね、私も大学でリーダーシップ論をやってくれというので頼まれてやっていましたけれども、それだから言うのではな

いですよ。ずっと政治家などを見ていて、まずいなと。

まず、サイトというか、原発の現場に来たことは、私の考えは先ほど言ったような見解です。

それから、菅の態度については、大変遺憾だと思うのです。特に民間人に、「一体何のためにおれがここに来たと思っているのだ」、これは本当に呆れて、私は寺田に出がけに、寺田もこの世界では新人みたいな人ですから、寺田に「総理を落ち着かせろ」と。文章には、落ち着かせろと私が言ったら偉そうだから、落ち着いて何とかと書いてありますが、落ち着かせろと言ったのです。寺田は黙って聞きますよ。それは私と彼の関係だったら。

副大臣といえども内閣の一員ですから、審議官とか武藤とか副知事には申し訳なかったと謝った。それぐらい大変な激昂でした。

僕は人を後ろから鉄砲で撃つのは嫌いだから、菅さんにもこの文章を渡しました。ただ、非常に遺憾なのは、打ち消しにかかって、あの日以外はほとんど冷静だったと朝日の記事で言わせたり。ということは、あの日は激昂したということでしょう。[redacted]

それは余談ですが、私が一番考えたのは、指導者がこの災害に格闘しているわけですから、やはり指導者は冷静でなければならないということ。それで、中曽根さんのことを思い出した。

当時、中曽根さんの評価はよくなかった。特に総理になってから座禅を組んだのは、スタンドプレイ。だけど、福島で私が考えたのは、中曽根さんを再評価したんだよね。中曽根が座禅を組んだのは、今にしてわかった。

つまり、指導者は冷静に、一国の総理はいろいろなことが官邸にいれば来るわけですから、沈思黙考して考えなければならんということで、やはりあれは彼にとって必要だったのだと。

だから、座禅という方法でなくても、トップリーダーというのは、静かに思い沈んで、時間が短くてもいいから思考はものすごく大事ではないかと私はそのとき感じたのです。それで秘書官にも言ったのです。それがその一つ。事故後の対応のハードの面ではないけ

れども、いきなり冒頭の指導者論みたいなので、ちょっと異質かもしれないけれども、現実に起こったことですから。

今回のあれでいろいろありますよね。保安院長との意思疎通がどうだとか、目の前にいたのにコミュニケーションをとれなかったとか。[redacted]そこはやはりコミュニケーションに問題があったということは言えると思うね。

これは推測だからまだいいですけれども、要するに一般論から言えば、年じゅう怒鳴られたら、その人に相談しないよな。僕らの事務所でも会社でも。そこは裏がありませんから、わかりません。

[redacted]

それから、ちょっと異質な話をしましたけれども、現地対策本部でありますが、人がだんだん集まってきました。初めオフサイトセンター機能不全と言われていましたが、それは、DG というか、停電したり何かしたりで初めこそ人がいなかったのですが、東京から言ったら遠隔地でもありますね。だけど、だんだん集まってきまして、菅総理が帰った直後、すぐに会議を開きました。そのときカウントしたわけではないけれども、40 人ぐらいだと思うのです。

資料の８ページ、こちらは全員に渡っていませんが、総理が出た後、そのころは現地対策本部は放射線班が緊急時のモニタリングを実施しています。機能していないと言われていますけれども、８時９分～19 分。

それから、９時には第１回機能班責任者会議をやって７班の配置、業務開始状況を確認した。最初ですから、続いて第２回を開いて、各機能班の実施状況の確認、対応方針の検討、放射線管理の徹底。

10 時半には、それを重ねた上、全体会議を開いて、各機能班の実施状況の確認。了解とかなんとか、不明とかあるのですが、ＯＦＣ の活動実施方針というのを決めたわけです。13 日夜の文章の中に１項目入っていると思うのです。OFC の活動実施方針、こういうことをやる。業務内容が書いてあります。

それから私の指示を決定した。私はそこで皆さんに対して、徹夜して参集したことに感謝する、スタッフの連携協力を強め、事実を予断なく把握して、熟慮の上、果断に実行してほしいとあいさつしたわけです。メモがありましたので。

[redacted]はそのころから動いたのですが、それで、避難状況の把握と地域住民への広報、ヨウ素剤の搬入準備等について、県や関係庁へ指示をした。

それから、ベントが行われていましたが、14 時半ごろベントが成功したという連絡が

入ったわけですが、その後、15時36分、最初の爆発があったわけです。本部にすぐ通報しまして、武藤副社長からそのいきさつについて説明を聞いた。水素爆発だとジルコニウムがあれしてはどうだというメカニズムを私は聞きましたけれど、これは容易ならないということを感じたわけでございます。

○質問者　池田先生が現地本部におられるときに、水素爆発の音は聞こえましたか。

○池田元副大臣　音がしたという話は聞いたけれども、音自体はリアルタイムで聞かなかった。

○質問者　オフサイトセンターにいる方で何か音がしたと言っている方がいたということですか。

○池田元副大臣　そう。自衛隊かな、大きな音がしたという通報がすぐありましたから、私は本部へ連絡しました、たしか。

それで、ざっとこれいきます、質問の時間もあれしなくてはいけないから。ちょっとはしょりまして。

6時には20km圏内に住民に対する避難指示が出たと。それで直ちに全体会議を開いて、応急対策を決定した。

東京の方では海水注入の話がいろいろあった。現地ではいろいろな、被ばくというか話の可能性が話題になってきたと。

12日はそういうことで終わって、13日は1Fの3号機がおかしくなってきた。まず、注水が難しくなってきた。ここに書いてあるように、HPCIで注水していたのが温度と圧力が低下したため停止して、RCICも起動しなかったと。

ベントの方も開という状態になるのだけれども、またうまくいかないということで、断続的に実施したが総じてうまくいかないということでございました。細かいことはここに書いてあるので。

現地本部は除染レベルの設定のための打ち合わせ会議を開いたりしていたのですが、それで各町村に指示をしたりしていました。

13日の夜は非常に危機的な状況であっても一進一退でした。そこで私は最初の2日間の活動状況をこの辺でまとめて、せき止めて、本省と大臣に送ろうということで送ったのがその資料です。

13日の夜にはまとめて、クロノロジーには、14日の零時半に、本部の方の池田[redacted]海江田大臣あてにペーパーと書いてあります。

13日朝にかけては、3号機の注水が滞って、格納容器の圧力が上昇したと。発電所長から冷却機能を失うおそれがあると通報があったと。連鎖的に1号の後は3号です。

いろいろありまして、その情報は全部時報みたいな、1時間ごとに私のところに来るわけです。プラントの状況という、保安検査官だけではなくパラメータという第一緊急対策本部から。それから、テレビ会議はものすごく有効で、事故調のあれにも書いてあったように、ERCに置くべきだったなと。あのとおりなんだけれども、すごく有効。だから、デー

タも来るし、私たちはそこに副知事とよくいました。

それで、３号が未明から、これもなかなか大変でして、相当危機的な状況になってきたと。７時 46 分に格納容器圧力異常上昇、冷却機能喪失となってきて、武藤副社長から本部に「池田さん、ちょっと頼みたい」「何だ」と。

それが先ほどの資料ですが、とにかく水が欲しいと。それで、14 日８時 20 分に武藤さんから自衛隊の給水車等を配置換えしてくれ、急ぐと。自衛隊、自治体消防も行っていたわけです。第２から第１に配置換えしてほしいという。

自衛隊、自治体消防の人を朝早く集めて、協議して、現地本部長の判断で配置換えを指示した。勿論、本部にも事後了承をとった。本部のクロノロジーにも 10 分後に書いてある、本部長の判断でと。そのクロノロジーにも書いてあります。

それで、配置が始まった途端に、11 時１分に水素爆発と思われるものが起きたわけです。これは非常にびっくりしました。今、指示して再配置したばかりで行ったところでしょう。８時 20 分に指示をしたから第１から第２に行って、川の水をくみ上げたりというのはまだいいのだけれども、自衛隊車に給水したり、そこに書いてあるように。それから、ろ過水タンクに入れたり、これはびっくりというか、しかも、再配置した人たち、自衛隊員や作業員、自治体消防の職員も行方不明です。リアルタイムというか、目の前でテレビ画面に出てくるわけです。事故現場の写真ではなくて緊対の雰囲気がね。全員行方不明、わからない。あの瓦れきの中に入っていったのかなといろいろ。戦場の司令官というのはこういうものかなというのは、内心ね。

どのぐらいかかったのかな。緊対のあれを見ていたら、東電の作業員が１人、見つかったというんです。よかったというのですね。[redacted]それでまだほかの人たちは見つからない。そう思っているだけで、勿論、黙っていましたよ。

そうしたら、かなりたってから次々と発見して、重傷者が１人、東電の作業員。自衛隊４人は軽傷、東電の関係の作業員は１人重傷で６人軽傷というのが、かなりたってからわかった。官房長官が会見していますが、そういうことがありました。

それに、これはちょっと水をちゃんとやらなければいけないなと思って、これも私の判断で午後、時間ははっきり何分とは覚えていないけれども、やはり自治体消防でも地方の自治体消防ではなくて東京のハイパーレスキューみたいなもの、これをやはり活用しなければいけないと思いまして、正午過ぎに松永次官に電話をしたのです。

これは保安院経由でやるといろいろなところを経由するから、うまくいかないのではないかと。私の少ない経験から言うと、自治省を担当したことがあるのだけれども、要するに東京消防庁とか何とか消防庁は都道府県で独立なのです。自治省とか総務省消防庁は消防庁だけど、国のあれなのです。だから、動かすのが難しいのです。

だから、次官同士の横のあれがあるから、松永に言って、自治体消防の専門部隊の派遣を要請してくれと言ったわけです。

その後のことはよくわからないのだけれども、結局、東京消防庁のハイパーレスキューが放水を開始したのは、19 日の午前零時半なのです。海江田が何かいろいろなことを言ったこともあったのですけれども。その夜、NHK の夜中の臨時のあれで、今、ハイパーレスキューの担当者が２～３人出て、涙流して、みんな英雄という感じでしたよね。そのときに聞いていたら、どこかの河川敷に行って予行演習していたというのですね。

これは別のところで調べていただきたいけれども、私が頼んだのは 14 日の正午過ぎでしたが、現実は５日後というか、19 日の午前零時半ということでありました。

それが１Ｆの３号機の話を中心にしました。

１、３の次は２です。２号機が 14 日午後６時ごろから非常におかしくなってきた。

初日も２号機が話題になったのですけれども、これは東電の班長が私のところに飛んできて紙を渡して。そのときのやつがどれだったか。

そのとき紙を見せたのです。私はパッと書いた。18 時 22 分燃料露出。20 時 22 分、炉心溶融。22 時 22 分、格納容器損傷。つまり破裂ということ。もう単純に２時間、２時間になっているのですけれども、これはもう大変な事態だと説明を受けた。

ベントもだめ、注水もだめだ。こういうふうに推移すると。すぐに保安院経由で本部に上げましたが、このときはこれでいよいよ来るのかなという感じでありましたね。

スタッフというか、幹部に言って、ミーティングを２回やって、まずこういう状況だから、あらゆる事態に備えるようにしておいてくれと言ったわけです。オフサイトセンター全体が、非常に緊張していました。

ところが、ここにも書いてあるけれども、東電の場合はベントのチョコチョコと言うのですね。チョコチョコが出るようになった。注水も入り始めた。しかし、予断は許さないと。そう長続きはしなかったのですが。しかし、基本的な流れはそういう流れ、理解でしたから。

19 時 20 分に保安院、東電、福島県、自衛隊の代表と今後の方針について検討。

私は現地本部長で、事務局長は審議官の黒木君がいたのですが、それ以外に東電の副社長。武藤さんは７時ぐらいに交代して小森常務が来ていました。福島県の内堀は私とずっと一緒。自衛隊は中央即応集団の副指令がこの日の 16 時に着任して、今浦さん。これも幹部会みたいにやって、私のごく狭い部屋ですがやって、なかなか移転するにしても場所がないと。150 人、車や人を配置できて通信手段が整う場所がない。

内堀君の提案で、福島県庁の旧庁舎の政庁はどうかというので、それも遠いけれどもいいなと。テレビ会議システムは東電の福島事務所から入るというのです。私の心の中では、それが大きかったと思う。そういうこともありました。

それで、再度緊急全体会議を開いて、移転の可能性を説明したと。準備をするように指示した。私の判断で、いきなり行っても、また業務を再開するのに時間がかかるから、先遣隊を派遣しようと。先遣隊を出すと言ったら、内堀が行くというから、内堀君行ってくれと。それで先遣隊を出した。

翌日、午前零時10分ごろに到着したというのがあって、その後、内堀はものすごくしっかりやってくれたのですが、業者を叩き起こして、政庁を整理してくれた、机を入れたりいろいろ。

その間に、私は、9時15分となっていますけれども、大臣に対して現状説明し、OFC移転の相談と書いてありますけれども、このときは基本的に大臣の了解をもらったのです。そもそもOFC移転については、ずいぶん前から話はあったのだね。

ただ、その間に一番強調したことは、それは一番最初にやらなくてはいけないのだけれども、2回目の会議のときに、我々だけ現場を離れるわけにはいかない。難破船の船長と同じで、我々はやはり住民が全部出てもらってから。勿論、移転を拒否している人はいたかもしれないけれども、その後で我々は移転をするのだと。ですから、住民が残っていないかどうかをチェックしてくれと強調したわけです。

これで、翌朝は2号のサプレッションプールが爆発というか損傷したわけです。一方、私としては移転のことについては住民のことが一番気がかりだったということであります。

それで、その双葉地区の要救助者リストというのは、私の[redacted]中にあったのですが、いろいろなことをやっていました。当時、余りはっきり覚えていないのだけれども、つまり、14日未明辺りからそういうところを言っていて救出活動を始めていたと思うのです。

その日の朝、双葉病院。これはいろいろ情報があるのですが、警察に言ってもわからなくて自衛隊でわかったという話があるのですが、要するに自衛隊が住民の支援をやっていましたから、12旅団が一番よくわかっていたと。それで双葉に人がいると確認できて、これはそのときの詳しい所在、後で聞いた話では、12旅団から住民用の車を出して、同時に現地対策本部から指示というか段取りをつけるために自衛隊のジープで3人派遣したと。

今浦指令によると、8時35分に自衛隊の今浦副指令の部下と住民安全班と県警の一人がジープに乗って双葉病院に向かって、そして現地に行ってすぐに合流したと。合流したのは、要するに住民を救出するための12旅団の車両。大型バス2台、救急車3～4台。

それで記憶のあれもないのだけれども、一番よく覚えているのが朝に、今浦さんだと思ったらそうではないので、本部長、私に対しては、双葉病院はピックアップしましたという連絡が入ったのです。

今浦さんかと思ったら、そこは違って。要するに自衛隊の3人から今浦に会って、今浦から審議官辺りが聞いて私に言ったと。直接、今浦ではなかった。初めは今浦かと思っていたのだけれども。別にそこはどうでもいい。行った自衛隊から、私、現地本部長に全員救出をしましたと。6人救出したという連絡が非常に脳裏に焼き付いているわけ。それで本部長としてはゴーサインを出した。

なお、海江田大臣ですが、朝にこういう状況だと電話をしたのです。説明するために私が衛星電話をした。そうしたら海江田が出てきて、池田さん、まだいるのと言うわけ。

いろいろ文書が残っているから、翌日移転を決めたというのは違いますよ。池田さん、

まだいるのと。住民を放っておくわけにはいかないでしょうと言ったら、別に自慢でもなんでもない、海江田は僕に、それは池田さんらしいと。事実、そのところやったのです。

そこに残っている文書は、それは後で保安院に注意しましたけれども、私が前夜に上げたのです。私は文書でちゃんとやります。だって、組織人だから。海江田の了解も得たわけです。それで、向こうでも受けて終わりの話なのに、わざわざその文書を、今もあるのだけれども、もう一度送ってきて、これで判断でいいかと、もう一度資料を合わせるような文書にして送ってきたわけ。

○質問者　修正してということですか。

○池田元副大臣　ちょっと修正して。修正してといっても、内容の修正なんてほとんどない。そんなもの、ありませんよ。

それで、私は叱ったわけです。それは6項目にも入っているけれども、この非常時にそういうことをやっていたら、矛盾でしょう。もう一度、確認するように。勿論、私のことだから文書を出した。海江田の口頭で、勿論、了解をもらったのだけれども。

ありますよ。たくさんあるので見て。

○質問者　これが15日の朝の。

○池田元副大臣　これ。これが15日。

○質問者　朝8時ぐらいにした。

○池田元副大臣　これは私は叱ったけれども、事後承認で文書を整えたという意味なら別にいいのだよ。実態はこうと違うから。わかりますか、官僚によくあるではないですか。

この文章は、その前夜に私が書いた、筆を入れた。

だから、これは事故調で話題になるとは思わなかったのですが、私としては保安院の連絡の仕方として非常に遺憾だから、注意と言うか、[redacted]指示した、申し訳ないということになっているのはそういうこと。なぜ、また改めてやるのだと、私が全部書いているのに。これがあります。

これは秘書官もよく知っているよね。私がそれを遺憾だと言って、あとで注意したわけですから。それはそんな話で。

それで結局、10時59分に郡山というか、都路街道を通って福島県庁に行って、そこで松下副大臣が待っていて引き継ぎをしてというのが、最初の方の。

その後の事故対応もあったけれども、保安院に対する6項目の指示も出したし、現地へ行った経験から言って、タイベックスーツとか防護品とか、物資が足りているかどうか全部チェックしろと経産省の部局に言ってチェックしました。

それから、INES の発表の仕方。レベルが全然ずさんな発表だから注意をした。私たちに相談も余りなかったし。ほとんどそれに書いてありますが。

大変だったのは、戻ってほとんど毎晩遅くまでやったのは、石油パニック対策。これも拡大輸送ルートと緊急措置を決めた。JR 貨物などを使って、広域的な。

そして、また3月末から再び行って、そこは最後の資料に書いてあるとおりにやりまし

た。また個別には内容を説明しますけれども、大体流れとしては以上のようなことですので、何なりとお聞きいただければ。

○質問者　ありがとうございました。

最初の方から時系列的に、順番にお聞かせ願いたいと思います。

もうほとんど聞きたいことを説明いただいたので、非常に細かい話になってしまうのですが、当初、池田先生が現地本部長で行くということには、もともとはなっていなくて、本来であれば、現地対策本部長に松下副大臣が行くということになっていたのでしょうか。

○池田元副大臣　全く関知していない。

○質問者　防災訓練などで行っていますよね。

○池田元副大臣　ただ、防災訓練などのときは松下君なのです。

○質問者　そうですよね。

○池田元副大臣　私は経産省では何をやっていたかというと、明確には規定はないのだけれども、私は[redacted]任大臣、トップの副大臣なのです。松下は私の後。私は予算とか税制とかいうものをやってきた。松下君はどちらかというと、原災なんかが起きるときの現場に行ったり、海外のいろいろな交流とかをやっていました。

ただ、わからないけれども、これだけの事故だから、いやおうなく私に来たと思います。何もそのとき、だれも疑問に思わないし。あとから松下君が行ったし、あれだからそうなるかもしれないけれども。これはごく自然だった、副大臣をやっている以上は。トップの、[redacted]任の副大臣として。

○質問者　わかりました。

12日午前零時ごろに現地に到着されて、いろいろプラントの状況について保安検査官からの説明等を受けられたということなのですが、既にその段階では11日の午後9時過ぎごろに現地は1Fから3kmの外に避難せよという避難指示が出ておりました。

○池田元副大臣　そうです。

○質問者　その避難状況については、何か報告はございましたか。御記憶はございますか。

○池田元副大臣　報告はない。ないけれども、たしかニュースで聞いたと思います。

○質問者　わかりました。

○池田元副大臣　それは、例えば内堀は私に言ったかもしれないけれども、記憶がないというだけで、ないとは言えない。

○質問者　記憶喚起で、例えばこんな話はございましたか。3kmの区域はほとんど津波のときに避難していて、もう避難も終了していますとかいう話は御記憶にございますか。

○池田元副大臣　町の職員が大変だという話は聞いたけれども。

○質問者　わかりました。

○池田元副大臣　最初は、先ほど言ったような話で、ベントとか事故の鎮圧の側が中心です。内堀がいたのはよかったのですが。

○質問者　引き続いてオフサイトセンターの話になりますが、済みません、2ページ目の

ところで、横田所長に指示した、これは吉田所長ですか。
○池田元副大臣　いや、これは横田。保安検査官。
○質問者　保安検査官室、わかりました。
○池田元副大臣　どこかに書いてあるよ。
○質問者　失礼しました。保安検査官の横田所長ですね。わかりました。
○池田元副大臣　これが要領を得なくてね。
○質問者　最初の説明された方が横田所長ということですね、わかりました。
　それから、先ほどの御説明の中で、このメモランダムの中にあるのですけれども、ベントは一義的に事業者の判断で行うべきことを伝えるとあって、その前提として、政府の方がかなり前のめりに入っている感じがあったと。具体的にはどういう認識でいらしたのですか。
○池田元副大臣　ですから、先ほど言いましたけれども、海江田大臣が記者会見をすると。東電ではなく海江田が記者会見をするというから、正しい政治と企業というか、この社会の在り方というか、責任論というか。これはやはり政府が一義的に発表するのではなくて、事業者がやるのは当然だと。何も法律を読んだわけではなく、私の考えです。そのとおりだと、みんな言いますよ。それで私が言ったわけです。
　ベントだって、そんなあやふやなことをやって、政治の責任になったら困るでしょう。事業者が一番わかっているのだから。事業者が具体的にやるのだから、それを政治がサポートすればいいのであって。でも、みんなわかっていたから、保安院の会見でもそう言っているわけだけれども、ちょっと政治的に前のめりになる恐れがあると感じた。
○質問者　わかりました。
　菅総理が来られたときの状況については非常にリアルに説明をいただいたので理解いたしましたが、その後、オフサイトセンターに戻られて、当初 OFC の要員が 40 人ほどいて、その後 140 人ぐらいに増えていったという話でしたが、このときから、つまり 12 日から福島の方に移転される 15 日までの間になかなか集まりが悪かったという印象はございますか。
○池田元副大臣　そう言われていますけれども、評価の問題だとしたら明らかで、あくまでの事実関係でいえば、40 人ぐらいが結局、最終段階、15 日ぐらいには 140 名ぐらいになったわけですけれども、勿論、中にいる人もいて外に出ている人もいるからあれですが、あの状況の中で、私の当時の感覚から言うと、会議をやっても各班全部いるわけです。だから、欠落したという印象は全くない。
　ただし、せっかく事故調さんが、それはいいことですけれども、厚労省が来ていなかったというところが一番、ティピカルな例かな。官房長に来てくれと言うと、厚生何とか課長が来て、ついこの前、聞きましたよ。そうしたら、医政局への連絡が十分なかったという言い訳をしていました。
　要するに、15 日にハクノというのを県の災害本部に派遣して、19 日には 2 人、県の方

へ行って兼務にさせた。最後、OFCは21日から専任になったという話で。ただ、ERCへは情報を取るために人を出した。医政局への情報伝達は十分ではなかった。これが私の厚労の厚生科学課長に対するヒアリングの結果なのですが、私はそこまでちょっと問題だと思ったのですが、しかし、誤解しないでください。現実、痛痒はそれほど感じなかった。

なぜかと言いますと、医療班にいろいろ問題はあるにせよ、医療班はちゃんとあって人はいたのです。本部長はいちいちそんな細かいところまで関与していないから、医療班やっているなと。

黒木に聞いてみたら、医療班はちゃんといたではないかと。いたと。医療班はどこから来たかと言ったら、細かい内容はわかっているけれども、要するに放医研とか県の保健所とか、日本分析センターから来て、大体最初から6人いたのです。

だから、現地本部長としては欠落しているなどと考えもしなかったし、業務は行われたわけです。除染の基準まで決めているわけだから。

そこを私があれしたいのは、オフサイトセンターの機能不全だとかも、大きく丸めて何度も書いてあるけれども、正直に申し上げて、そこは違うのではないか。それは個別、具体的に書くべきです。

それから、もう一点。後で総括的だけでも言いたいのだけれども、簡単に文章は書けるのです。マニュアルを持ってきて、マニュアルとおりに来なかったと。でも、そのマニュアル自身がおかしくなっているのだから。

だから、そういう点で立論の、はっきりしてやった方がいいのではないかという感じはしました。結局、具体的な事実ね。だから、あとちょっと遺憾なこともないわけでもないけれどね。

○質問者　例えば除染基準、ちょっと細かい話というか技術的な話なので、本部長まで上がっているかどうかというのは、もしかしたら上がっていないかもしれないのですが、現地と県、除染するのは福島県ですので、作業をする福島県と国との間で除染基準が違っていて。

○池田元副大臣　出ていたね。

○質問者　それが結局、違ったまま何日間か国の方の指示が出されないで、最後は国が。

○池田元副大臣　6,000cpmですか。

○質問者　おっしゃるとおりです。それか、10万かということなのですが。それについては何か。

○池田元副大臣　県の方は意識しなかった。我々の基準は決めたということは本部長は理解していまして、食い違いとか何とかは当時は意識していなかった。

○質問者　わかりました。

○池田元副大臣　先ほどの人のことでちゃんと言っておかないといけないのですが、その文章とか現実問題として、オフサイトセンターが機能しないというのとは全く違って、そういう部分もあったかもしれないけれども、基本的には業務を継続してずっとちゃんと執

行したわけです。

ただ、厚労省はそういうことで来なかったけれども、ちゃんと初めからカバーしたと。文科省の放医研とか。

先ほどの移転に絡む話なのだけれども、これは言っていませんが、移転をするときに住民がとにかく残っていないかということが私にとって重要なことでありまして、それと同時に、それが一番大事なのだけれども、やはり業務の継続性も大事だと思った。だから、先遣隊を派遣した。

それから、みんなが整然として業務を損なうことなく移転すると。そのために2回目の会議では、点呼は各班何人いるか、私の指示で全部申告させたわけです。そうしたら、福島について出発かと聞いたら、来ないやつがいるのです。

○質問者　オフサイトセンターにいたのにということですか。

○池田元副大臣　そうではない。いないやつがいるのです、いなくなった人間。ふけたと思っていたの。初めはそう思っていた。これはやはり重要な仕事だから、前夜に医療班何人、住民支援班何人、7班全部チェックして、車はどうと。ちゃんと整然とやるのが私の主義だから、こういって、総括班長にメモを取らせた。

ところが翌朝、行くときになったら数が足りないところがあった。医療班、業務支援班。業務支援班はいろいろ、業者だから、ある程度仕方ないところが、業務支援のために来ている、電気会社のあれとか電気工事会社とかだから。それで、医療班も班長以外いない。

それも後で調べたのだ。私の一番気がかりだった。責任を果たすというのは、私のあれでやっているのに、そういうのでは。

結局、厚生省が来なかったので、放医研とか6人でやっていたのです。彼らはやってくれた、ちゃんとやった、任務を果たした。ただ、その晩に、[redacted]君が来たんだな。それで14日の晩は7人だったのです。

ところが、2人は福島の第2病院へ行ったと。2人は放医研に戻ったと。それから、2人は県庁へ独自に行ってしまったと。1人だけが我々本体と一緒に行ったと。

つまり、私は初め、ふけたのはけしからんと、今でもふけたというのはおかしいと思うのだけれども、事情を聞いてみたら、要するに本部長の指示に反して無断で県庁へ行ったりしたと。100%戻っているわけではなくて、ほかの病院へ2人行ったり、2人は放医研に戻ったのだけれども、あとの2人は県庁へ無断で行ったと。みんな無断で行ったのだけれども。それで、[redacted]君という1人だけが我々と一緒に福島へ行ったということがあったということを今日、初めて申し上げた。

もっと脱落者が多かったのではないかと思ったが、そうではなかった。結局、あの危機的な状況の中で、しかも厚生労働省が来ないときに放医研の人たちが一生懸命やってくらたのだけれども、最後のところで結局、1人はちゃんとやったけれども、ほかは独自行動というか、無断であれしたと。

仕事を放棄したわけではない。交代で2人戻ったのはいるけれども。仕事を放棄したの

ではないかと思って危惧はしたのですが、それだけ私はチェックしたのです。神経質ではなく、当たり前ですが。それはあります。

要するにそういうことで、厚生労働省が来ていたらどうかわからないけれども、本部長としては与えられた条件の中で最大にみんなやってくれたと思うのだが、その点だけが若干の心残り。

いろいろ世間の人はいうけれども、与えられた条件の中で現地本部のみんなはよくやってくれたと思うのだけれども、そういうことがありました。それはちょっとやはり事故調だから言っておかないといけない。

○質問者　その６人の方は、ちなみにこれは確かにやむを得ないなというような事情はあったのですか。

○池田元副大臣　後から聞いた話。初めは私は本部長として遺憾に思っていた。だって、私が全部チェックさせて、朝に行ったらいなかったのだから。

○質問者　後から聞くとみんな、それなりにやむを得ないなというような理由だったのでしょうか。

○池田元副大臣　理由が、全く放棄したというのと違って、病院に行ったり、前夜早くも浮き足立って県庁に行ってしまったり。だから、職場放棄とか職務放棄というのは薄くなってきたわけです。

○質問者　この１人残っていたのは、どこの医療班の所属ですか。

○質問者　[redacted]先生は放医研ですね。

○池田元副大臣　放医研だね。だけど、医療班はちゃんといたのです。ただ、移動のときに、初め私が受けた報告では脱落というかいなかったから。でも、後で調べてみたらそういうことだった。それだけチェックしたのです。

○質問者　わかりました。

それから、原災本部長権限の現地対策本部長への権限委任の話は、質問項目の中にも入れていますが、これについてはオフサイトセンターの方で黒木審議官と何か話をされた記憶はございますか。

○池田元副大臣　これは明確に覚えていないのだけれども、多分あったと思うのだけれども、わからない。そこは無責任なことは言えない。ただ、そういう事務的なことはすべて事務方に任せていたから。悠長なとき、普段なら全部関心をもってやるけれども、重要なことかもしれないけれども、それは任せていましたから。ちゃんと事務方はやったのだけれども、結局、催促したけれどもそうならなかったわけでしょう。

だけど、実態行為としてみなして決裁とれたということで、12日から指示文書を発出しているから。それが障害にならないように。

○質問者　それは非常に我々としては積極的ないい判断だったなと。

○池田元副大臣　そこで止まってしまったらおかしくなってしまうじゃないですか。

○質問者　はい、おっしゃるとおりで。

【取扱い厳重注意】

○池田元副大臣　現地は、あの条件の悪い中で本当によくやったと思う。
○質問者　わかりました。
○池田元副大臣　ちょっと２～３分休憩しませんか。５分ね。
○質問者　14日から15日にかけて、２号機の状態がおかしくなり、かなりこの時期、線量も相当上がっていたと思うのですが、その線量の状態は。
○池田元副大臣　線量に対する意識は、私はなかった。壁にあったのです。
○質問者　線量計ですか。
○池田元副大臣　そう。２階の壁にあったのです。

ただ、上がってきたとか何とか言っていたけれども、私が見たときは余り上がっていなかった。帰ってくると、だんだん、全部入り口の規制が厳しくなってきた。あれしたり、脱いだりしましたけれどね。

ただ、信じられないというか、本部長としては放射線防護のシールドとかがなかったというのは、あのとき知らなかったですよ。そんな意識はなかった。もう当然、そんなことはやっているはずだと信じているから、何も疑問も持たない、前線の非常用設備で。

でも、考えて見れば、蚕棚も飯もないという状況だから、すべて疑ってかかった方がよかったのだろうけれども。そんなことありえない話があり得たのだね。
○質問者　食料はカレーしかなかったのですか。
○池田元副大臣　それは資料にもあって、レトルトのご飯とレトルトカレーしかない。水とカロリーメイトだけで３日間。

資料はいっぱいあって、総括班というか支援班に調べさせたら、みんなチェックしたら最大３日分。しかもそういうふうに種類が少なくて。

後で私が帰ってきて、16日に保安院に指示をしたら、その後に行ったときはもういっぱいあったけれどね。そのときは町がやっているからそんなものは余り食べなかったけれども。

だから、飯を１回食べ損なうと大変。毎日同じだから、２～３日目かに１食抜いたら、次に食べられないでしょう。１日２回だから。劣悪でしたよ。

本部長室とあったのがこの半分ぐらいで、全部木なのです。だから、寝ても寝ることができないくらい。夜中の２～３時にテレビがついたりなんかしているところで皆さんは突っ伏して寝ていた。最後は地べたに段ボールか何かを敷いて寝ていた人もいた。これが非常用設備か、緊急応急対策をするところかと思った。
○質問者　寝具というか、毛布もない。
○池田元副大臣　ない。
○質問者　ないのですか。
○池田元副大臣　ない。内堀副知事も全部同じ。こういう大部屋の机の上であれするという。
○質問者　暖房はいかがですか。寒さはどうして。

○池田元副大臣　暖房はあった。暖房も全部、支援班が庶務的な判断で。暖房も燃料が補給が効かないから。３日目、２日目、それも全部調べた表があります。みんな自給というか、余りできない。
○質問者　オフサイトセンターの建物の中では、マスクとかタイベック着用まではいかなかったのでしょうか。
○池田元副大臣　一生懸命やっていたので余り鮮明に覚えていないけれども、後半はつけている者もいた。私は全くつけなかった。防護服などはつけていました。ここまでやる人は少なかったと思うのだけれども。
○質問者　マスクはつけなくても白いタイベックは着ている人は多かったですか。
○池田元副大臣　考えてみれば不思議で、シールド、防ぐものがなかったんだものね。これは本当に、事前の備えがひどかった。
○質問者　中間報告でも書かせていただのですが、かなりいっぱいある電話回線とかFAXとか、通信回線が地震の段階でかなりやられて、非常に東京との連絡が困難を極めたということをヒアリングで聞きました。
○池田元副大臣　６項目の中の１項目で、結局、うちの方ではなく、まず県の原子力センターへ行って、記録には書いてあるのだけれども、一応の通信設備も、そこは衛星電話が１台ありました。１台しかないから、そのとき海江田と松永に電話しただけで、そう頻繁にやり取りできない。
　それから戻って、オフサイトセンターが主要だけれども、それは結局、衛星電話が２台しか持っていない。１台は兼用電話で、こちらのテレビ会議の方に１台あって、もう一つ窓際に１台あって、その窓際のをみんなが使い回す。したがいまして、幾ら現地本部長といえども、そう頻繁にできないし。だから、どうしても連絡に支障が出る。これもお粗末と言えばお粗末。
○質問者　14日の午後７時20分に今後の方針について検討する会議を開かれたということですが、このときに移転すべきという議論をされているわけですか。
○池田元副大臣　ここのところは、７時20分は幹部です。移転を検討したのです。
○質問者　これはやはり大きな理由は線量ですか。総合的にいろいろな要因があったのでしょうが、大きな理由というのは。
○池田元副大臣　線量、それはひいては第１プラントから５kmの近傍だということです。
○質問者　２号機が非常に危ない状態になった。
○池田元副大臣　そう。だから第１の各１、３、２と連鎖反応的にあったでしょう。それで５km でしょう。原災法でのプラントのところの境界線の放射線がどんどん上がってきているわけです。大熊町のオフサイトセンターは顕著ではないけれども、そういう傾向にあったんだけれども、いずれにせよ５km 圏内でこれからいろいろなことが起きる可能性があるのに、20kmみんな避難させているのに、５kmだから移動すべきだと。
　代替施設の相馬の方はもういっぱいで使えない。小学校とかなんとかいっても、人がそ

れだけ収容できて、通信手段が確保できるところはない。それで県庁はどうかというので、あってよかったぐらいで、なかったらもうお先真っ暗ですよね。

そもそも、事故調の最後のあれでそうなるでしょうけれども、すべて事前の想定がおかしかったわけです。非現実的というか、そうではなかった。これだけの未曾有のアクシデントに対して応えるものになっていなかったわけです。

○質問者　後から見ればということかもしれないですが、5km のところにつくるということ自体がね。

○池田元副大臣　国会の質問であるけれども、全国のほとんどがそう。データがありますけれども、近いところばかり。要するに事故を真剣に考えていなかった。防護もしていないというのだから。

○質問者　ちょうどこの 14 日夜に、非常に1F が危険な状態になるということで、そこについていた保安検査官も戻ってくるのですが、その保安検査官が戻ってきたことについては何か、オフサイトセンターで話題になったり、あるいは話を聞いたりということはありますか。

○池田元副大臣　それは後で私は問題だと考えました。そのときは把握できないから。それは後で聞けば、1階にいて、そこでも同じ状況だと言うのだけれども、やはり使命から言ったら、第一緊対というかプラントの方でチェックというか、担当ということで言えばそこにいるべきですから。

実は、2度目に行ったときに勤務表を全部提出させた。

○質問者　13 日の早朝にということですね。

○池田元副大臣　そうです。御存じのように後で是正されました。後で行けということで。いつかな。移転したところのあれは福島に来てしまったけれども、また行ったのです。

○質問者　行きましたね。

○池田元副大臣　また行ったのです。だけど、私とすれば、それは非常に遺憾です。

○質問者　前の日の 13 日に改めて保安検査官を1F に行ってちゃんと見なさいと言われた、その指示は直接には横田所長から出ているわけですけれども、そういう指示を出すに至ったいきさつについて。

○池田元副大臣　前とはいつの話ですか。

○質問者　13 日です。12 日の朝に保安検査官は一旦戻ってきて、13 日の朝にまた1Fに行きなさいと横田所長の指示を受けて行くのですが。

○池田元副大臣　それは横田が言ったのか。

○質問者　はい。現にそういう指示を受けて4人行っているのです。

そのときに海水注入をきちんと監視しなさいと言われたと言っていまして、それは海江田大臣の方からそういう指示があったと聞いているところですが、そのいきさつは。

○池田元副大臣　それは明確に覚えていない。

○質問者　そうですか、わかりました。

○池田元副大臣　明確に覚えていないけれども、保安検査官の勤務対応は十分ではなかった、改善しなくてはならなかったと思っています。それは、もう一度行ったときに勤務表をとって、これから注意しようと。報告がないからね。

そうしたら、即座にノーでしょう。ほかのことを考えるという。報告・連絡・相談と、報告がないからね。それは保安院の独特のあれですよ。先ほどの文書のあれとか、いろいろな点で。だから6項目の指示を出した。その中には入っていないけれども、同じような話だと思います。

○質問者　わかりました。

質問事項の中に入れさせていただいておりますが、相馬病院。先ほどいただいたペーパーによると、相馬病院だけではなくて14日の段階で相当残っていた。

○池田元副大臣　それはかなり終わったと思うのです。残っていたのはそこですね。それは1日前だから。

そこの文書にも書いてあるように、手分けして救出したわけでしょう。それはよかったと思います。

○質問者　先ほどいただいた。

○池田元副大臣　ここにほら、3時15分に検査チームが出発して、これが対応しているわけだ。最後にこれが残ってしまった。

○質問者　この3月14日3時15分検査チーム出発と、この検査チームというのは、これは済みません、何のことでしょう。

○池田元副大臣　だから、除染というか、その現地へ行って除染するチームだと思います。

○質問者　病院に行って、入院患者さんの。

○池田元副大臣　そう、検査。

○質問者　検査なのですね。

○池田元副大臣　そういう意味の検査。放射能検査というか。

○質問者　わかりました。

そうすると、3月14日の午前3時15分の段階で、ここの一覧表に書かれているような人数の方がまだいたということになるのでしょうか。

○池田元副大臣　いたということです。これから言うと、恐らく病院だから厚生省辺りか県のそういう担当部局がまだ残っているリストをつくったと思うのです。それでうちの方へ来たわけです。

それで結局、班が対応をして、こんな時間だけれどもやったわけです。そう理解していればいいです。

○質問者　双葉病院で患者さんが残っているというのを現地本部長が初めて認知したのはこのときですか。

双葉病院に患者が残っているという報告があったのは、この14日。

○池田元副大臣　個別、双葉病院ではないけれども、そういうものがあった。

○質問者　こういうものがあったのが大体 14 日と。
○池田元副大臣　うん。先ほど言ったように、それでもピックアップした救出活動がまだ済んでいないのが、最後に残ったのは双葉病院で、それは自衛隊の 12 旅団が把握をしていたと。
○質問者　例えば避難に関して住民がまだ残っている場合に、オフサイトセンター、現地対策本部がやるべき、やった役割というのは具体的にはどういうことなのですか。
○池田元副大臣　住民支援班が 20km 圏外へ誘導する、搬出というのか、人間だから救出して運び出すという。それは警察や自衛隊がちゃんと班があって、トップがいて、班長がいてやっていますから。
　それは、こうやって完了していたのです。だけど、そういうところに残っていたわけです。一般の住民は 14 日にはほとんど完了していた。
○質問者　14 日のちょうど朝方というのは、一番本部長が大変なころ。注水の関係で、給水の指示をされていて。
○池田元副大臣　大変だったよ。
○質問者　ちょうどそのころにも双葉病院の自衛隊による救出をやっていたらしいのですね。それはもう給水等の関係でお忙しかったので、そういう報告は受けた覚えはないですか。
○池田元副大臣　受けていない。受けたという記憶がない。
○質問者　それと、池田先生が本部長として現地におられて、御記憶としては 12 旅団が救出に当たっていたということですか。
○池田元副大臣　後で聞きましたら、結局、中央即応集団というのは確かにそうなのだけれども、事故対応なのですね。12 旅団は住民対応。
○質問者　なるほどね。
○池田元副大臣　中央即応集団は例の CB 何とか、核とかなんとかに対応する部隊でしょう。それは事故対応ということで、オフサイトセンターに次の指令が来たわけです。外回りは 12 旅団で、住民をピックアップするとかいろいろ把握していたわけです。警察よりそちらの方がよく情報が入った、把握していたと。
○質問者　中央即応集団の方々は、プラントのまさに給水の関係とかをしていた。
○池田元副大臣　そう、それで備えていたわけ。あとはみんな J ヴィレッジに行ったわけです。
○質問者　先ほど、池田先生のお話で、3 月 15 日に移転する前に病院からの搬送を確認したと。そのときに、8 時 35 分ごろに副指令、今浦さんですか。副指令の部下と住民、安全・保安院と警察官が現地へ行って。
○池田元副大臣　ジープに乗って、現地に出発したのが 8 時 30 分。多分、近いから、それでバスとか救急車と合流したわけです。それで確認して、どこへ連れて行くということになって、それでそこから全員、車に乗せたという報告がジープから来たわけです。

私は今浦さんから受けたと思ったら、本人に聞いたら違って。だから、だれか私の幕僚というかスタッフから聞いたと思います。

○質問者　そのときの話では、全員救助しましたよと報告があったと。

○池田元副大臣　よかったと思った。それが気がかりだったから。

○質問者　実際、まだ調査中なのですけれども、朝の段階ではその後、3回に分けてやっている可能性があった。

○池田元副大臣　3回に分かれている。

○質問者　1回目は終わっている時間帯かもしれませんが、2回目、3回目。14日夜から15日未明にかけてまで続いている感じで。これはちょっとまだ調査中なのですけれども。

○池田元副大臣　だから、私は96人と受けた。

○質問者　お聞きになっているのですね。わかりました。

○池田元副大臣　朝10時半ごろ。

それと、もう一つ問題があるのではないのか。それについていえば、報道によれば。やむを得なかったのかもしれないけれども、北に行ったり南に行ったりしたのでしょう。それで亡くなる方が出てしまったわけでしょう。どうしてそうなったのか。非常に重症の方もいる。だけど、これについては私は責めを果たしたと思ったわけ。やはりそういうもの全く関係なく移転などできないのだから。

それから、医者がどこかに行ってしまったというのも誤報らしいな。

○質問者　大体95運んだことは間違いないのか。

○池田元副大臣　これには80になっているのだよ。

○質問者　さらに残ってしまっていたという話か。

○質問者　さらに残って、16日までどうも続いたらしいです。

○池田元副大臣　その件については弁護士がいますよ。私は連絡だけあって接触していないけれども、調べています。ああいう報道はちょっと遺憾でしょう。

○質問者　わかりました。

○質問者　もし、池田先生、御記憶があればですが、14日、自衛隊員が給水の関係で活動されますよね。11時1分の3号機の爆発で軽傷を負われたということがあったのですが、もしこういう話を聞いたことがあればということなのですが、その後、自衛隊に対して一旦退避命令とか撤収命令が14日に出たという話をお聞きしたこととかありますか。

○池田元副大臣　それは是非、事故調で調べてほしいのです。これは結局、[redacted]憶病になってしまった。16、17、18の消火のときも、上からやるときもそうだったけれども、[redacted]臆病になってしまったと言われていますが、そういう感じがします。

○質問者　それはやはり感じとしてはありましたか。

○池田元副大臣　うん。

北澤さんと私は親しいけれども、防衛庁長官が幕僚長にお願いしたということはないでしょう。記者会見でお願いしたと。注水や消火というか、散水のために出動をお願いした

と言っている。だから、想像すれば、自衛隊はかなり固くなっていたと思う。

それから、もう一つ言うと、[redacted]臆病になっていたと思うのですが、3 月末から 4 月に入って行方不明者の捜索を[redacted]被災地でやったわけです。自衛隊はそれこそ半端ではない、数を調べればわかる。2,000 人とか 3,000 人とか 4,000 人投入する。警察はせいぜい 500 人とか 600 人、数が違う。

自衛隊は核心に入らない。20km 圏内まで入るのは警察。20km 圏内には決して入らない。警察から情報をとって、警察の後を追って 20km 圏外でずっと捜索を続けていた。

それで私は、書いてあるけれども、これは北澤さんではなくて海江田から言わせたのかな、20km 圏内でやってくれと。警察もやっているし。それでようやく 5 月 1 日から 20km 圏内に入ったのです。

それまで多く動員して、警察の後追いをして周りでぐるぐるやっていた。警察はものすごくやったと思う。警察は 20km 圏内に入って、警察署長がヘリで降りたでしょう。同行記者を集めてやったでしょう。私、素晴らしいと言って電話して激励したもの。

ある県首脳に言わせると、放射能については知っている人ほど臆病になると。そういうことを言っています。

○質問者　そういう感覚はやはり現地本部でもありましたか。

○池田元副大臣　でも、最初の 14 日の朝の出来事が彼らにとってはいけなかったらしい。[redacted]

自衛隊もよくやったのですが、ただ、[redacted]そういうふうに。それはある自衛隊関係者も否定しなかった。

○質問者　3 月 14 日のお昼、水素爆発以降、池田先生がごらんになられて、自衛隊の一部、人数が少なくなったとか、移動していったというような具体的な御記憶とかございますか。

○池田元副大臣　私自身は直接はありませんけれども、報道とかによればそれらしき話があったみたいだな。それから、自衛隊が来てもう撤収するのだと住民に言ったという噂もあるし。結びつけるとそういうことになると。

○質問者　直接先生がお聞きになったりしたことは、当時現場ではなかった。

○池田元副大臣　直接はない。だから、それは皆さん、調べてくださいよ。それは客観的なあれだから。

先ほど、医療班の代替してくれた放医研とか、みんなよくやってくれたと思うのだけれども、最後、あわててみんなと一緒に移動しないで先に県庁に行ったりしたというのもそうだよね、浮き足立ってというか。専門家なのにね。専門家ほどそうだ。

○質問者　オフサイトセンターに詰めていた自衛官もいたと思いますが、住民安全班とか。その人たちは最後の池田先生から言われるまで。

○池田元副大臣　それがわからない。

ちょっと聞き書きしましたら、結局、先ほどのリエゾンオフィサーではないけれども、3人ばかり連絡係でジープで行きましたね。副指令は待っていた。3人帰ってきたわけ。

それから、114号で県庁に行こうとしたけれども混雑していて、郡山の方から県庁まで来たのです。だから、そういう意味でオフサイトセンターというか、現地対策本部詰めの副指令は一旦は県庁へ来たと。

[redacted]

東京消防庁などは聴き取りはしないのですか。

○質問者　これからです。

○池田元副大臣　これから。

双葉病院において救助に難を期した理由というのは、寝たきりだから大変だったと聞いています。

○質問者　まだ残っている時点で、何かOFCの本部の中が驚いたり大変だとかいう雰囲気はなかったですか。

○池田元副大臣　OFCの中は、私が何度も言うものだから、住民を見つけたら、とにかく外に出てもらわないといけないし、それをやってから最後に私たちが出るのだという意識を植えつけたから、そういう空気でしたよ。

ただ、後であのときにいたとかいうのもあるけれども、かなり任意で残っていた人たちが。あのときは報道がすごくあって、自衛隊なんかが行っても拒否したおばあちゃんがいて。そういうあれでした。

あと、その後の話をちょっとしましょうか。

最後の項、この前、渡してあるやつですね。いっぱい資料はあるのだけれども、任務遂行の状況から、オフサイトセンターの最近の活動状況というのがあって、仕事はしたつもりなのですが。

私は3月15日に帰京して、その後行ったのが、3月29日ごろだと思うのです。

住民の一時立ち入りがございまして、すごく住民の希望が多くて、私が経産省の服をつけていると何言われるかわからないというものだから、お忍びで行って住民に率直に意見を聞いた。会津若松の体育館に行って。

そうしたら、何人かの人が、やはり一時帰宅、とにかく家に物をとりに行きたいと。それともう一つ、[redacted]女性などで避難所で貧富の差があると言う。何ですかと言うと、お金を持ってきた人と持ってこない人と全然違う。お金は持っていないといけない。だから、お金が欲しいと。必要なお金ね。当座のお金は必要だと。

この2つは優先的に何より早くやらなければいけないと思いまして、まず、住民の一時立ち入りは、先ほどの話に関わるのだけれども、これは大変なオペレーションなのです。我々がやるバス旅行とは違う。

全部、住民を避難所から連れてきて、ある1か所に集めて、防護服を着せて、中に入れ

て、バスか何かに乗せていって。バス停みたいな、駐車箇所を決めて、そこで自宅に行って物をとって帰ってきて、戻ってきて、それで圏外に出て除染をしてという。

その間に、住民によっては、家にとどまりたいという人がいるかもしれないし、イヌ・ネコがいたらどうするとか、大変なオペレーションなの。

それで私が行った直後の会議で、毎日朝晩会議をやっていますから。どうやったらいいか担当者でブレインストーミングをやれと。これはなかなか難しいオペレーションだった。

それで毎日、ブレストをやって、4月4日にはその実施計画をまとめたのです。こんな文書になるような、いろいろあるから。それで本部に上げた。そうしたら、本部がなかなか決めてこない。

初めは、現場の自衛隊のバスがあって、自衛隊のバスを使うということになっていた。でも、どんどん後退してしまって、民間の借り上げということになった。しかも、なかなか決めないから、4月 15 日に早く決めろと文書を出したのです。原災本部長や官邸の警察庁から来ている伊藤に。それでようやく動いて、それでわずか 10 日間ぐらいで決めて、各首長と会談して。

首長にもめちゃくちゃなことを言う人がいまして、当然、河内村とか小規模なところからやるでしょう。しかも、私の発案で難しいからトライアルをやったのです。ある町長は双葉郡全部一緒にやれと言うのです。それはできないといって、そんな調整までやらなければいけない、全部やった。

それで結局、連休中の3日にトライアルをやった。これは大きくニュースになりましたよね。[redacted]浪江町長を説得とかやったりして、5月6日から開始して。私は5月 20 日ぐらいに任務を離れたけれども、すごく現地本部は一生懸命やって本当に激賞したのだけれども、ほとんど事故なく一巡したわけです。今、2巡目とかに入っている。こういうことがありました。

もう一つの仮払金の支払いというものが、結局、住民の要望が強かったものですから。初め、別のもう一人の副大臣は、市町村長を集めて銭を配るということを言ったらどうかというから、それはだめではないかと。東電に対しては住民は怒っているわけですから。謝りもしないで金だけくれるのかというのが必ず出ると。

それで私が海江田大臣に4月7日に、東電のまず謝罪が先ではないかと。何か御殿女中みたいな会社だから、県知事にアポをとってもとれないから来ないと言っているから、ばかを言うなと言って。とにかく、これだけのことだから県知事のところに行って名刺を置いて来いと。とにかく来なさいと言って。

それですぐ、4月 11 日に清水に来てもらったわけです。それでテレビの前で県民に謝罪した。これはテレビニュースで見た方もいらっしゃると思いますけれども。

それで1つセレモニーが済んで、あと副社長が関係町村、初め7つかな、謝罪訪問したわけです。初めは、清水が、立地町村だけとその日に行くと言うから、それはおかしいのではないかと言ったのですがね。

それで、謝罪訪問して、ついては仮払金を支払いたいのでお願いしますということになると、結局は市町村の窓口で住民とのあれになりますから。住民の要望とか、文書を受け付けてやるわけですから。そうなると東電は毎日のように僕のところへ、この町はこのようになりましたと表をつくって持ってきまして、結局ものすごくスピーディーに、連休前に支払い開始ということになったのです。これは要望に応えたつもりなのです。現地対策本部の仕事なので。

あと、警戒区域、計画的避難区域の設定というのは、私は住民の方からいったら若干問題があると思っていたのです。まず、市町村長への指示の発出者は、先ほどの話と逆だけれども、これは重大なことだから、現地本部長から中央本部長に上げれるようにしてくれと言ったら、そうなりました。

警戒区域は、要するに役人の世界は、取り締まりとか何とか管理主義的な発想が多いのです。そうではなくて、生身の住民がいて、そこで家財などがあって心配しているわけですから、それの兼ね合いがあるわけです。地元の人は、私の考えについては理解してくれている。

それからあと、公益立ち入りというのがありまして、これは警戒区域を設定した後、中に工場の備品、金型をとりに行きたいとか、いろいろあるわけです。それの基準を決めて、これはめくら判ではないけれども、できるだけ応じることにして、どんどん入ってもらった。

それから、あと3km 圏の立ち入りについても、かなり詳細なマニュアルではないけれども考え方をまとめたと。これはその後、実現できたのかな。

あとは野馬追用の馬の圏外への移動については、私が早く認めてあげた。これは高村君という、1 年生議員が現場に初めについて、ものすごく彼は貢献したと思うのです。牛や豚や馬のことも。彼が私について行っていますので、こういった点でも現地本部長としては個別案件だけれども積極的にやったということです。

あと、防犯体制は、私は初めから空き巣が 20km 圏内で横行するのではないかと思ったら、そのとおりになってしまって非常に遺憾だったのだけれども、中野寛成国家公安委員長に増員を要請したりしたのです。

それから 20km 圏内における行方不明者の捜索は先ほど言ったとおり、ようやく重い腰を上げたと。

あと、いろいろ現地本部に人が来るので対応をしたし、広報的なことも地元の民[redacted]民友でインタビューをうけたということもやったのです。これは事故の直接な対応ではありませんが、これも現地本部の大事な仕事なので、是非、これも総括するときにはテーマとして挙げていただければと思います。

○質問者　3つ目の○の警戒区域、計画的避難区域の設定、この発出を現地本部長から中央の本部長の方にしたということですが、ちょっと先ほど頭の中が混乱したのは、むしろ現地本部長の方がよく御存じなので、現地本部長がやった方がいいかという話かなと思っ

たのですけれども、これは逆でもない。

○池田元副大臣　逆。これはかなり強権的なこと。私は正直言って、余り積極的ではなかった。いずれやらざるを得ないのだけれども、時期とか住民との対話とか、こういうものは総合的に考えないと。ただ、管理主義的な発想があったと思う。

だから、非常に不平等になったし、しかも、そんな取締りはあれなのに、空き巣だってこれをやったからどうということはないのです。空き巣は想像どおりに多かったわけですから。

こういうところは、やはり全体を見て、イニシアティブというか、現地の本部長の仕事だと思います。上から目線ではなくて。上からバサッと警戒区域とバリアをつけてというのは、簡単かもしれないけれども、現実問題、大変ですよ。

家財道具とかだけではなくて、いろいろな意味で。自宅の近くに牛がいるとか、いろいろなあれがあるではないですか。しばらくの過渡的な措置とか、いろいろあっていいわけではないですか。

○質問者　もうちょっと後の話になるのですが、先生が5月19日～[redacted]日に入院されて、その間の本部長の代わりにどなたかというのはなかったのですか。

○池田元副大臣　当然ありますよ。私のレポートにも書いてありますけれども。

○質問者　その間、ずっと不在になってしまうのは問題という。

○池田元副大臣　再三に渡り後任を決めるように、具体的に名前も挙げて言ったけれども、そのままにしていたわけです。だから、身内の恥をさらすようだけれども、これは事実だからしようがない。我々は国民に対する責任を負っているわけですから、責任ある立場なのだから、当然、現地本部長が離れたら即決めなくてはいけないことでしょう、事柄上から言ったって。政務官もいるのだし、それを決めなかったのは非常に私は遺憾だと思う。政権の一員として申し訳ない。

○質問者　これは何が原因なんでしょうか。

○池田元副大臣　それを機会に交代させようとか動きがあったかもしれないけれども、わからない。ただ、非常に余り人間的でないというか、そういうあれで余りよろしくない。これは事故調になじまない、政治の世界のお話かもしれませんけれども、ただ、筋目から言って、正直申し上げて、これは全くおかしなことなのです。

これは先ほど言ったように、だれしもわかるとおり、当然、責任がある立場だから、後任は決めておかないといけないというのはだれしもそう思うと思うので、それが発覚したときに直ちに菅総理から電話がかかってきて、後任は、田嶋政務官は決めました、池田さんはそのままと言ってきた。そうなるのです。

ところが、非常に遺憾なことに私が不在だったというのがそればかり、1行だけで報道されて、私が職場放棄をしたような印象を与えかねないというか。私はこういう人間だから、ものすごくはっきりしていて、別にポストなど全然、どうってことないのだけれども、後任者を決めないのが、ちょっとよくなかった。

○質問者　済みません、ちょっと１点忘れていました。

３月 15 日に松下副大臣に引き継がれたときに、引き継ぎを直接されているようなのですが、そのときの重要なポイントといいますか、強調されたことは何かございますか。ここはひとつよろしくなというような。

○池田元副大臣　今、言った仕事の内容を報告して、まだ事故対応は続いていますから、そこは、その当時言っていたとおり、しっかりと事実関係を把握しないといけないねという話はした。客観的に、じっと考えて。何かある種、措置をとる場合だったら、十分な条件というか、データとか何とか。これは秘書官なども、私がよくそう言ったと言っていますけれども、そう言った。

それから、初めの５日間は事故対応が中心でしたけれども、これからは被災者の方々が大きなウェートになってくると。松下さんはそちらの方を随分やったのです。だからちょうど交代時期がよかったのではないかな。

松下さんは本人が言っているとおり、市町村長を回ったり。結果的に被災者支援チームの事務局長にまでなった。あれはごく自然な、当然最初の修羅場を担当したから交代させるということだと思うので。

○質問者　東京に戻られまして、これはすごく、担当された中ではそれほど大きな話ではないのかもしれませんが、３月 17 日になりまして、作業員の線量限度を 500mSv に上げたいのだという話が持ち上がっていて。

○質問者　17 日に小佐古参与と空本議員が副大臣室に来られて、そういった話をされに来たのかと思うのですけれども、覚えていらっしゃいますか。

○池田元副大臣　何、いつ。

○質問者　３月 17 日の夕方ぐらいです。

○池田元副大臣　夕方、だれが来たと。

○質問者　小佐古参与と空本議員、その少し後に長島議員が。

○池田元副大臣　空本と、何ですか。

○質問者　空本と長島議員と小佐古参与。

○池田元副大臣　どんな字ですか。

○質問者　小さい、佐藤の佐に古いと。

○池田元副大臣　それはオフサイトセンターというか、福島に来てから２人会ったね。それは後の話だけれども、副大臣室に来たことはありません。

○質問者　そうですか。

○池田元副大臣　空本先生のあれは、後で４月かな、私のところに表敬ではないけれども来た。

○質問者　３月のときは会われていない。

○池田元副大臣　会ってないと思う。

○質問者　先生、時間はいいですか。

○池田元副大臣　いいですよ。これは重要だから。乗りかかった船だから。

これは、戻ってきてからの副大臣の日程表、これ6項目あるでしょう。ちゃんと取ってありますからね。18時、長島昭久議員。

○質問者　これは17日ですか。

○池田元副大臣　17日。例の防護服がどうだとか、製造局の商務流通審議官や保安院に事前に説明させて、放射線限度量の。その後は石油連盟要請だよ、これ。

○質問者　長島議員の来られた後になるんですか。

○池田元副大臣　そう。空本君は副大臣室に来ていません。

○質問者　長島議員から、どういう話があったのか。

○池田元副大臣　それは500mSvにするということ。それで記憶をたどりましたよ。

記憶をたどって、ここにデータも、これはこのためにしつらえたのではないけれども、要するに長島が総理の指示によって、細野補佐官を補佐し、放射線の許容量について担当することになったという話で連絡があったわけです。ついては池田副大臣に上記許容量について考えを聞きたいと。

私は今のデータにあるとおりに、その前に保安院の意見も聞きました。だから、これは何という話ではない、立ち消えになった話ですけれども、これは従来の炉規法では、緊急災害従事者への許容放射線量を100mSv／hとしていたのを、14日づけで250mSvとしたのですが、今回の事故の緊急性を見てこれを引き上げる、国際基準、ICRPの500mSvまで緩和すると。これはどうかと聞いてきたわけです。

だけど、勿論、慎重にやらなければいけないけれども、このときはそんなに定かにあれではしませんでしたけれども、やるならやるで、ちゃんと限定してやるべきだという空気になったと思うのです。

だけど、これは沙汰やみになった。それだけの話です。

○質問者　これはその後、事務サイドの人間や大臣とかに何か話されていますか。

○池田元副大臣　それは秘書官に聞かないとわからない。でも、私には必ずすべて報告しているからあれだけど、これで終わりになっているのではないかな。続編はなかった。

○質問者　この日のうちに話がなくなってしまったのですが、官邸からの指示がないのですが、準備はしなさいよという話は事務方には降りてきていたようでして。

○池田元副大臣　[redacted]

それから、もっとマクロで言ったら、何とか本部が乱立したでしょう。それでその何とか本部が乱立してので、それを整理するチャートができたくらいだから。その後、整理したけれども、場当たり対応が多くて。[redacted]

だから、それはみんなでやったからうまくいったのではないかな。ちゃんと組織としてのコミュニケーションというか、稟議ではないけれども、いろいろ意見を聞いて最後、決

定して下ろすというようなのが本来だけど、その中でいろいろがんがんやったり、泣いてしまったりというような状況[redacted]ね。

それにしては、大きなあれはなかったのではないですか。この期間は、非常にリスキーなあれだったよね。

だから、本部が乱立したというのはわかりやすい問題点だから、マクロではそれは問題ですよね。

もう1点、先ほどちらっと言いましたけれども、この事故の反省というか、レビューは大事だと思っていますが、視点をよく考えていただきたい。これを論評するなり、客観的に批判、分析して、あるべき成果を出すというか、それを置いて、分析非難というか、そのときのあれとして、今までは何かごっちゃになっていると。

例えば、マニュアルに基づいてオフサイトセンターは機能不全、機能しなかったと何度も書いてある。マニュアルだと、各自治体が全員参集して合同対策協議会をつくることになっている。当時、そう考えたから、果たして今度のシビアが、シビアの深刻の度合いと横の広がりが全然違う。深刻度が違って、複合災害で。

例として今、1つだけあげましたけれども、そういうときと平和な時代につくったマニュアルというのはどうなのかと。そのマニュアルから出発して、今度は違ったというのは全くおかしいのではないかと。当事者としていろいろやってきた私からすれば、おかしいのではと。

もっと大きく、将来の日本を考えて、やはりこういうときはこうあるべきで、それからいったらこれは違うのではないかと。だから、単なる批判ではなくて、こうあるべきだというのはあるけれども、クライテリアというか、判断基準が皆さん、ないとなかなか立派なことは書けないのではないかという感じが。余計なことを言えばね。

文書を書くのは簡単だ。今までのあれから言ったら、食い違いがあったり、今までのマニュアルと違うところがある。そうではないのでしょう。

私はそう思うのですが、どうですか。

○質問者　いや、全く。

○池田元副大臣　それは私は前向きに期待しているものです。

○質問者　昨日も夜、議論をしていたのですけれども、このマニュアルと県のマニュアルとかいろいろありますが、なぜここをちゃんと詰めていないのだろうなというのは結構ありましたね。

○池田元副大臣　だから、今回の事故対応で、そこから始まると思うのです。防災センターとか分析する場合は。まず今、考える知見の中ではこうであるべきだと考えて、それから言ったら違うのではないかという。ところが、今から考えるとお粗末なのだけれども、絵で書いたようなマニュアルはあるわけだ。そこから出発して論議をしても意味がない。

だから、当のオフサイトセンターをあの期間、担当した私からすれば、オフサイトセンターは、具体的な理由があれば機能してないといってもいいのですが、一概に全体として

機能しないとか何とかは違うのではないかと。そういうのはイエス＆ノーで部分的には両方あると思うのです。

だから、少なくとも３月 11 日の朝から人が集まり、何ら疑うことなく職務があって、職務を執行したことは事実なのです。だけど、世間で見ると、すべてオフサイトセンターがだめだったから官邸がやったとか、中間報告も大体、そんな調子だった。

何か所ある、オフサイトセンター。オフサイトセンターはものすごく言いやすい。官邸に言うのはちょっと勇気がいるから。官邸はせいぜい、上と下でちょっと違ったという話で。官邸の本質的な部分の１つは先ほど言ったような、為政者というかリーダーの資質の問題もあるし、コミュニケーションのとり方とかあると思う。それが結局、本部の乱立とか場当たり対応などに表れているわけですから。

そうすると国民はそういうあれで納得する。だから、なかなか難しい作業だと思います。期待していますよ。

○質問者　確かに、基本的に現場の与えられた状況の中で機能したと。現実には、通信機能はかなり麻痺して、電話１本しか使えないとか、道路は至るところ渋滞やら陥没やらで、いろいろ移動や集合がうまくいかないとか。

そういう中で、本来あるべきであった業務なり、その瞬間、瞬間やるべきであった業務で何か支障を来たしたということは具体的にありますか。

○池田元副大臣　私にとって、今、すごくよかったのですが。私としては何も飾らない。率直に言って、与えられた条件の中で仕事ができたと思うのです。与えられた条件、与件というか、あの状況の中で。オフサイトセンターの建物のあれから、通信状況の悪い中では。通信状況が悪い、いろいろな困難の中では。人繰りもなかなか大変なときで。最終的には後世の人が評価するのですが、私としては与えられた中で最大の努力をし、何とかできたのではないかと思います。

それともう一点、今、何を聞いたかな。もっと大きな、私がどうとかいうのではなくて。

○質問者　そういう状況の中であっても、何らか問題点としてこういうことがあったとか。

○池田元副大臣　先ほど申し上げたような。

あと是非、参考になると思うので、今度の原子力の複合、深刻な事故の対応策は現在、今までの前提すべてあれして、こうだというのがあって、それから言うとこの点がだめだという発想で御教授いただければ、国民というか我々にとってありがたい。

中間報告にも片鱗は出ていますよね。ざっと読んだ限りでは出ているけれども、ごっちゃになっているので。

先ほど、柳田さんは通信手段とか何とかおっしゃったけれども、社会というか、今の日本の特性から言ったら、現段階では例えばローカルで原子力事故は事故処理ができないでしょう。原子力事故というと大きな事故、東電なら東電、全社的だよ。プラントとか何とか個別ではなくて全社的。

それから、政府もやはり中央政府だよ。そうでしょう。できませんよ、地方政府や地方

のあれで。ローカルで処理できる話ではないでしょう。場合によっては、もっと国際的な支援を求めたりしたら、なおさらそうですよ。だから、東電の本社に本部ができたわけです。

今の時代で、例えば、現地対策本部で避難区域の設定から何から、全体的な視野というか総合的なあれから言っても、やるべきではない。いろいろな知見とか、何とか。今、ITの時代に。

局部の地震なら別だけど、原子力事故というのは全社的に対応する、いろいろな人の知見が必要だし、海外からも必要だし、リソースもいろいろなところにあってやるということで。

○質問者　国が入らないとどうしようもないですよね。

○池田元副大臣　国と会社全体のあれだよ。

○質問者　原子力災害対策の基本的な考えというのは、現地対策本部をつくって、できるだけ現地でどんどんやれという建前があるわけです。ところが現実に、現地本部から例えば海江田さんなり何なり、あるいは官邸にこう言っても決めてくれないとか、勝手に現地でもっとやってしまってもよかったのではないかとか、それぐらいの権限があったとか、そういうことはないですか。

○池田元副大臣　現地でやった方がいいというのは、後半戦ではありました。先ほどのいろいろな、公益立ち入りとかあって。

最初の方は、現地ということではなくて総合的に事故処理は判断しないといけないから、現地だけで判断できないです。だけど、自衛隊の配置換えとかは緊急事態でやりましたが。それから、給水というかハイパーレスキューを早く出してくれとかやりましたよね。

総合的にやるのは、やはり原発は国でやっているわけではないから。原子力事故というのはローカルではない、ナショナルなのです。あるいは前に言っていた、グローバルなのです。だから、将来の原子力事故対策というのは、多分、今までの枠組みとフレームは全く違っていくようになると思う。

○質問者　そういう場合、現地の例えばプラントの中だと、あるいは４つプラントの中の全体の、吉田さんがやったこととか、そういうところは混乱していたり、現場というのは意外と状況がわからなくて、東京にいた方がわかるとか、いろいろ災害というのは難しい問題があるわけです。

そういうときに本当にプロの技術者なり、技術的判断なり、例えばプラントについての状況を把握したり、こういうところを見落としているのではないかという助言をしたりというのは、むしろ離れている東電の本社なり保安院なり、そういうところで判断した方が、意外と落とし穴を見つける。

○池田元副大臣　そうですね。

○質問者　そういう点で、何か中央の技術的技量なり判断なりというのが機能していなかったのではないかという感じがあって。

○池田元副大臣　私が事故対応の緊急対策本部のテレビ会議は大体座って、ときには発言しますよ。その一つは、東電が大き過ぎて、いろいろなところに意見を求めなければいけないというのがある。ああいう東電本社の緊急対策本部はすごいですからね。後ろに何班があっていっぱいいて。

むしろ、単純な学者の意見、数人の意見を聞くとか、人に聞くとかいうのではなくて、班別で一応、シミュレーションをしたやつを一々映し出してやるわけです。それがいいときもあるけれども、そうでないときもある。全体がわかっていない人も多いわけですから。だから、ときどき吉田所長がいろいろクレームをつけたりやっているわけです。

ちょっとずれるけれども、東電という会社の特性が１つあると思うのです。今のから言うと結局、学者とか何とかの知見をうまく生かすシステムはないのではないかな。それから、絶対、孤独というか一般の会社にあるような孤独な判断というか、リーダー独自の判断というのはない会社ですよ。やらない。みんなで一緒に渡れば怖くないという会社ですよ。　それから余り、専門家と言っても知らない、皆さんが指摘したように、機器の取り扱いすらおぼつかないというのは、お寒い話で。東電という会社は、一般の会社でいうリーダーが決断する会社では全くないです。今回のもなかったでしょう。成り行きでそうなったというあれで。

○質問者　こういう原子力災害というのは、本当に何が起こっているかというのは、システムについて何でも知っている男が必要になってくると思うのです。

○池田元副大臣　ジェネラルとそういうこと。ジェネラルというか全体のあれではなくて、この原発事故全体の。だけど今、細分化してしまっているし。

○質問者　ある意味で言うと、東電だけではなくて保安院も、そういう判断をできる人が、院長か次長が知りませんが、いない。

○池田元副大臣　ただ、それ以前にペーパーにも、メモランダムに書いたけれども、緊張。冷戦の後、デタントぼけと言われたけれども、まさに緊張緩和というか弛緩しているわけ。特に保安院は緊張緩和ですよ、デタントぼけですよ。東電もそうかもしれない。

それから、よく言われるのは、そのために安全神話に依拠をして無為に過ごしてきたというのが現状でしょう。これはもう、まぎれもないあれですよ。勿論、原子力村は、東電から政府の関係者も、保安院を中心にそうですよね。だから。原子力災害対策は全く不完全なものだったわけですよね。

そういう中でたまたまやって、そういうことを感じました。

○質問者　政府内でこれだけ不完全な意思決定のプロセスなど、何か混乱してしまうようなことを防ぐために、危機管理のそういう政治的な組織。例えば、外敵に対しては、内閣の中で危機管理を結構やっていますよね。だけど、こういう国内の危機、大変な災害とかいうものに対する危機管理というものが形成されていなかったのではないかと思うのです。

○池田元副大臣　防衛以外はないでしょう。災害で一応、形はあるけれども、災害の対応策は、これを機会に全部見直すべきですね。一応、できていてありますがね。

○質問者　国民の命にかかわるという意味ではね。
○池田元副大臣　そう。防衛はありますよ、それは軍事的には当たり前の話で。だけど、こういう災害に対しては、これほど弱さを露呈したわけだから、もう一度、やり直さないと。そういう意味で重要なのですね。
○質問者　原子力というのは何十年にわたり、プラントを増やしてきて、いろいろな体制に持ってきて、小事故に対しては、その都度手当てをして、いわばバンドエイトするみたいにやってきたわけですが。
○池田元副大臣　そう、弥縫策ね。
○質問者　ええ。根源的にそういうものをやってこなかった。それが政権が代わっても、気づかずに引き継いでいたと。
○池田元副大臣　厳しく言われると、そのとおりだと思う。それで、ぱっと。
　ただ、これを政治家が気づくというのは大変なことだと思いますけれども、結果は何とも言えませんがね。
　ただ、渦中に飛び込んで、余りにも枠組みがひどいというのは、正直言って枠組みが不十分だと感じました。
○質問者　例えば戦争で負けて、戦前の日本の陸海軍のシステムなり官僚のシステムというのが憲法が変わって変わったのかと思ったら、基本的にはほとんど変わっていない。
　そういう意味では自民党は民主党に変わったからと言って、体質みたいなものは変わっていないというか。
○池田元副大臣　私に言わせれば、これはちょっと時間がかかりますけれどね。そうにわかに変わるわけではないので。だけど、求める人は求めますから。
　日本的に言って、確かにそうかもしれませんが、ただ非常に、昔、言われたことがそのまま東電に残っているというか。やはりこの20～30年が会社のシステムとか何とかでも、新しい時代に即応して変わったと思うのです。結構、責任体制というか、リーダーシップというか、会社も引っ張っていって、それで失敗したら辞めて、次のやつがやるという、組織にはダイナミズムがあるわけでしょう。露骨になって、ある種、新自由主義的な発想かもしれないけれども。
　だけど、東電という会社にはまさに昔の日本が残っていたわけです。その辺は十分詳しくないのだけれども、東電と付き合っていると、無責任の体系というか、だれも責任をとらない、突出しない。みんな、周りを見てから判断する。決断ということはない。それをつくづく感じた。
　東電に全部押し付けるわけではないが、東電というのは特異な会社だと思いました。
○質問者　清水社長は経営畑、武藤さんは技術畑、それで一番原子力を知っている。だから、武藤さんが決断しなくてはいけない。それを社長が是としなくてはいけないものが本当のリーダーシップではないかと思うのですが。
○池田元副大臣　個人的に批判するわけではないですけれども、武藤さんが最も遠い人で

す。何を言っているのかさっぱりわからないですよ。あれだけのトップで、私はコミュニケーションがとれない。

例えば、水素爆発のメカニズムなどあったら明快に言ってくれるけれども、普段の方針とか何とかも声は小さいし、それがリーダーというのだから。現地にいて、すごく感じました。

内堀というのは普通の、戦後育った優秀な自治官僚だよね。武藤さんは何を言っているのか、さっぱりわからない。責任とか何とかではなくて、そういう世界だったのです。そういうことの体質論までいってしまっている。

○質問者　やはり、現地対策本部にいて、そういうことをひしひしと感じられた。

○池田元副大臣　ひしひしと感じた。武藤さんも含めた東電の個々の人、親しくなった人たちもいるけれども、そういう人たちも批判的というか、要するに責任をとる体質ではない。決断して引っ張っていくということはない。みんなに交じって、そろりと船の方向は決まる。船を引っ張る人がいない。清水などを見てもわかるでしょう。

[redacted]。[redacted]、大変な会社が今回の事故を起こした。

○質問者　所長の吉田さんとは議論したことはないですか。

○池田元副大臣　そんな話さない、議論はできなかった。

だから、テレビ会議では連中が主役だから、私もこちらにいたから話をしますけれども、腹を割ってコミュニケーションをとるという感じではない。本当は話したかったのですけれども。

○質問者　どうですか。吉田さんのテレビ会議の中の発言を聞いていて、どのような印象を受けましたか。

○池田元副大臣　その中で異質だったのです。今、言った東電というのは、ある種、無責任の体系で、絶対飛び出さない。しかし、吉田さんは現場を負っている責任感からノーを言える人だった。本部はそう言っているがこうじゃないかと。珍しいのです。

彼は所長をやっているから、心を決めたのです。そのためにやるつもりで。彼は全部、擁護するわけではないけれども、異質。意思決定の中で、はっきり意見を言うのは。

○質問者　今日、お尋ねする項目からちょっと外れるのですが、吉田さんの話が出たので。

吉田さんが海水を入れるかどうかというときに、官邸筋の話として、社長から直接吉田さんに、会社は使ったらだめだと止めたという話が出て、循環させたわけですけれども、吉田さんはそれを受けて、現地のプラントの免震棟の本部で、そういう連絡があったときに大きな声で、政府の命令で海水は止めろと言って、だけど、小声で部長には止めるなと言ったと。

○池田元副大臣　その話は本当ですか。

○質問者　それはどういう形でその情報をお聞きになったのか。

○池田元副大臣　私はあまり関与していないですが。だけど、まことしやかに昔の弁慶で

はないが、歌舞伎的ですね。本当にそうなのかな。芝居を打ったのか、わからない。わからないことはわからないというか。だけど、吉田さんはそんな芝居を打つのかな。もっと真っすぐな人だと思うけれども、そういう芝居を打ってだますとかよりも。わかりません。

○質問者　実際には海水は止めていない。

○池田元副大臣　止めていないです。政府の方はもたもたしたわけです。指示がわからない。[redacted]

ついつい、私もそのときは力を入れてやりましたので、久々に話ができてよかった。

○質問者　ありがとうございました。

○質問者　いろいろ、機微にわたるものまでありがとうございました。また長時間、いただきまして。

○池田元副大臣　いえ。是非マクロで視点をしっかり、我々に御教授をいただければありがたい。私も協力したかいがあろうということでありますので。

○質問者　我々も、法律、マニュアルが正しいという前提では全くありませんので。

○池田元副大臣　ないですよ。やたら、そういうあれがたまたま出ていたものですから。

後でまた何かありましたら、協力しますので。

○質問者　ありがとうございます。

○池田元副大臣　また何か言ってください。